

目 次

生命科学案内.....	宇城啓至(1)
「(わたくしの) 図書館だより」	山川和義(7)
新規受入図書案内 (2009年4月～2009年9月受入分)	(11)

生命科学案内

生活科学科教授 宇城啓至

わたくしの担当科目である生化学は、難しいとよくいわれます。たしかに、教科書を見ると、いきなり糖や脂質の構造式が出てきて、化学を履修してこなかった人は、どこをどう見たら良いのかわからず、混乱することと思います。しかし、構造式については、おおよそそのかたちと、反応の前後で変化するところがわかれば良く、すべてを覚える必要はありません。代謝経路図にしても、鉄道の路線図だと思って、まずは解糖経路からクエン酸回路という糖代謝の幹線を理解し、そこに脂質の代謝経路がどのように交叉するのか、アミノ酸の代謝産物がどこに合流してくるのか、順を追っていけば、わかってきます。

遺伝子科学についても、教科書の説明は抽象的で実感がわきません。しかし、たとえば癌遺伝子がどのようにして発見されたのか、その経緯を知ることができたら、理解も深まると思います。そこで、本稿では、研究の現場に取材して研究者達を描いたドキュメンタリーや、研究者の自伝を中心に、読んであるいは見て面白く、生命科学の理解に役立つ本と映画を紹介いたします。

1. 遺伝子研究の現場

- ① N. エインジャー著, 野田 洋子ほか訳 「がん遺伝子に挑む」 上下巻 東京化学同人 1991年 三重短期大学附属図書館所蔵
- ② J. E. ビショップほか著, 牧野賢治ほか訳 「遺伝子の狩人」 化学同人 1992年 三重短期大学附属図書館所蔵

1970年代後半から1990年代にかけて、癌遺伝子や遺伝病の原因遺伝子の解明が飛躍的に進みました。がんウイルスの癌遺伝子と同じような遺伝子(原癌遺伝子)が正常

ヒト細胞にも存在し、変異・活性化されて癌遺伝子になるということ、癌遺伝子から作られるタンパクと同じようなはたらきをするタンパクが正常細胞にもあって、細胞増殖を制御しているということ、癌抑制遺伝子というものが具体的に特定され、それがどのように破壊されて発癌するのかということが次々と明らかにされました。さらに、逆行遺伝学 (reverse genetics) という、病気の人と健常人の染色体DNAの違いから病気の原因遺伝子を突き止める新手法によって、ハンチントン病や筋ジストロフィーなど遺伝性疾患の原因遺伝子が解明されました。

この時期に、癌遺伝子研究に中心的役割を果たした研究者を描いたのが「がん遺伝子に挑む」であり、遺伝性疾患の原因遺伝子究明に大きな役割を果たした研究者および患者とその家族を描いたのが「遺伝子の狩人」です。いずれも著者はジャーナリストで、一般読者に理解できるよう、丁寧にしかも正確に説明しています。癌遺伝子や遺伝性疾患の遺伝子科学について知りたい人にお勧めします。

2. 細胞成長因子の発見

③ リタ・レーヴィ＝モンタルチーニ著、藤田恒夫ほか訳 「美しき未完成」 平凡社
1990年 三重県立図書館所蔵

本書は、神経成長因子 (NGF) の発見によりノーベル医学生理学賞を受賞したユダヤ系イタリア人、リタ・レーヴィ＝モンタルチーニ博士の自伝であり、著者が、ファシスト体制とその後のナチスドイツ支配下の困難な時代を神経学研究への情熱と同胞の友情によって生き抜き、戦後、米国の自由な環境で、友人科学者たちと心を通わせながら、研究に邁進する姿が描かれています。実験神経生物学についても述べられており、NGF発見の経緯については第17～19章に詳しく、とくに第19章には、スタンことスタンレイ・コーエン博士との共同研究によって、思いがけないところからNGFの謎が次々に解き明かされるという、研究の面白さが生き生きと描かれています。訳も正確で、「1950年代初頭における神経成長因子 (NGF) の発見は、すぐれた観察者が、いかにして混沌の中から概念を生み出しうるかを示す、みごとな例証である」と評価されたことが納得できると思います。

コーエン博士は、NGFの研究中に、マウス顎下腺の抽出液が新生仔マウスのまぶたを1週間ほど早く開かせるという現象 (早期の眼瞼開裂) を見いだしました。たいていの人が見逃すか、スマートな人ほど見通しがつかないとして、それ以上追究しないような観察ですが、彼は、この早期眼瞼開裂を引き起こす物質を探求して、表皮成長因子 (EGF: 上皮成長因子と訳されておりますが、表皮成長因子のほうが原語にそっていると思います) を発見し、1986年、レーヴィ＝モンタルチーニ博士と共に、ノーベル医学生理学賞を受賞することとなります。

われわれの身体の細胞は、細菌と違って、栄養物質だけでは増殖・成長できません。細胞の種類に応じて、さまざまな細胞成長因子を必要とします。そのような細胞成長因子というものが、正体不明のものではなく、タンパクやポリペプチドであるとはじめて明らかにされたのが、NGFとEGFであります。

3. 20世紀で一番奇妙な薬

④ トレント・ステファンほか著、本間徳子訳 「神と悪魔の薬 サリドマイド」 日

経BP 2001年 三重県立図書館所蔵

サリドマイドは、手足の短いアザラシ肢症という先天異常を世界中に引き起こし、1960年代はじめ、市場から追放されました。その悲劇の薬が、昨年、日本でも血液がんの一種、多発性骨髄腫の治療薬として承認されました。本書は、この「20世紀で一番奇妙な薬「サリドマイド」の歴史をたどったものです。

本書の前半は、悪魔の薬としての側面を描いております。サリドマイドは、旧西ドイツの製薬会社によって合成され、ずさんな試験を経て「安全」な鎮静剤として販売されたこと、副作用の報告が無視されたまま販路が拡大され、世界中にアザラシ肢症患者が急増したこと、そして、薬害被害者が製薬企業に補償を求めた裁判の経過がたどられます。

米国や東ドイツは、サリドマイドを承認しなかったため、大きな被害を出さずに済みました。本書には、FDA（米国食品医薬品局）の女性審議官ケルシー博士が、安全性評価のずさんさを見抜いて承認しなかったため、「FDAのヒロイン、有害薬品の市場参入を阻止」として、アメリカの英雄とたたえられた経緯が詳述されています。

本書の後半は、サリドマイドが神の薬として復活する経緯を述べています。きっかけは、重症ハンセン病患者に対して、たまたま病院内に残っていたサリドマイドが処方され、症状が劇的に改善したことでした。その後、クローン病や潰瘍性大腸炎などの自己免疫疾患、さらに、腫瘍にも効果のあることが示されました。とくに、多発性骨髄腫は有効な治療法も少なく、最後のよりどころとなっています。

本書は、薬害のためアザラシ肢症となった人の声とともに、サリドマイドによって救われた患者の声も取り上げております。また、サリドマイドの副作用の分子メカニズムにもふれており、サリドマイドの全貌を知りたい人にお勧めします。

4. 「科学」もあてにならないことがある

⑤ W. ブロードほか著、牧野賢治訳 「背信の科学者たち」 化学同人 1988年
(講談社ブルーバックス版(2006年刊) 三重県立図書館所蔵)

データねつ造など、科学における欺瞞について、米国の例を中心に述べたものです。このなかの第4章に紹介されている、コーネル大学大学院生マーク・スペクターについては、わたくしも研究員として働いていた米国ヴァンダービルト大学で噂を聞きました。はじめは、生化学会のビッグネームであるエフレイム・ラッカー教授のもとに天才的な大学院生がいて、昼夜を分かたぬ研究によって、細胞にとって大切なナトリウム・カリウムATPアーゼ(ATPのエネルギーを使って、ナトリウムイオンを細胞外へ排出し、カリウムイオンを細胞内へ取り込んで、それぞれのイオンの細胞内外の濃度差をつくっている酵素)のはたらきが調節されている機構をまたたくまに解明し、ついには、癌遺伝子からつくられたタンパクが、その調節機構に作用してがん細胞に特徴的な変化を起こさせるということを示し、これで2人のノーベル賞は決まりだと。しかし、1981年には、どうやら大学院生の実験には再現性(同じ実験をしたら同じ結果が得られるということ)がなく、一連の研究成果は疑わしく、ラッカー教授は信用を失ったというものでした。

私がいた研究室でも細胞増殖制御の研究をしておりましたので、ラッカー教授が講演で使われた資料か、あるいは、私のボスであるコーエン教授(前掲「美しき未完成」のスタン)に送られてきた論文原稿であったか、そのなかの写真データを見たことがあります。

その写真は、リン酸化アミノ酸を検出・同定するためのものだったと記憶しているのですが、放射性同位元素の位置を示す斑点が妙にくっきりして、たとえていうとインクをぼとんと落とした様に見える、実物の写真には見えなかった印象があります。しかし、そのような印象は、あとでそういえばあのときの写真はと思いつくのであって、当時としては、高名なラッカー教授から一流の学術誌に掲載されようという論文であり、内容も、当時の研究者が似たようなことを予想していたので、積極的に疑う理由がなく、皆が受け入れていたわけです。

本書には、ガリレオやニュートン、メンデル等の歴史上の科学者による欺瞞をはじめ、さまざまな事例があげられています。あの野口英世博士についても、その業績の多くが誤りであり、価値を失っているとされており。著者らは、科学になぜ欺瞞が生ずるのか、科学者の社会を分析して問題点を指摘していますが、結局は、露骨な欺瞞はごくまれであるにしても、科学にはつねに欺瞞が入り込む余地があるとしております。

本書の刊行後も、データねつ造のたぐいは絶えることなく、マスメディアのニュースに取り上げられたものもあります。実験科学では実験の再現性が問われるので、いつか欺瞞は暴かれます。しかし、現代科学は細分化が進み、専門が違くと、科学者であってもよほどのことがないと判断できません。また、忙しい現代では、科学界による検証が充分になされないまま、「科学」が大きな影響を社会に及ぼすことがあります。ある説が「科学的に明らかである」といわれても、一度は疑って、その検証が充分なされているか、その証拠(evidence)は何か、自分なりに考えることができたらと思います。

5. 恐怖のウイルス

⑥ リチャード・プレストン著、高見浩訳 「ホット・ゾーン」 上下巻 飛鳥新社 1995年(小学館文庫版は1999年刊) 三重県立図書館所蔵

エボラウイルスは、1週間ほどの潜伏期の後に、人間の肉体の、骨格筋と骨を除くすべての臓器と組織に浸透して、融解させる。患者は、体中の孔という孔から血が流れ出て、3-4日後に死亡する。もっとも猛猛なザイル株の致死率は90%である。そのエボラウイルスが、1989年米国首都ワシントン近郊の町レストンにある霊長類検疫所(モンキーハウス:輸入されたサルの検疫所)に突如出現し、フィリピンから輸入されたサルの間で広がっているのが発見されました。ただちにアメリカ陸軍伝染病医学研究所を中心とする特別チームが編成され、制圧作戦が遂行されます。本書は、この制圧作戦を中心に、マールブルグウイルス(エボラウイルスと同じフィロウイルスという科に属する)とエボラウイルス・スーダン株とザイル株のアウトブレイク(突発的流行)を描いたノンフィクションです。

エボラウイルスのアウトブレイクは、今でもアフリカ中央部と西アフリカで起きており、100人以上の死者がでることもあります。その感染源としてコウモリが疑われており、旅行者でも、コウモリの巣くう洞窟を訪れたあと発病した例があります。一方、レストンのモンキーハウスで蔓延したエボラウイルスは新型のレストン株であり、そのアウトブレイクは、フィリピンから輸出されたサルに繰り返し起きております。さらに、2008年11月には、フィリピンの首都マニラ近郊でエボラ・レストン株に感染したブタが見つかっております。そのとき、ブタを扱っていた6名もエボラウイルスに感染しました。幸い、

レストン株は人に対する病原性はないようで、発病してはおりません。しかし、いつ変異を起こして人に対する病原性を獲得するかわかりません。レストン株は、感染力が強く空気感染するといわれております。もし、このウイルスが人に対する病原性を獲得したら、その危険度はインフルエンザと比べものになりません。

6. 映画から学ぶ

⑦ 「ロレンツォのオイル」 ニック・ノルティほか ユニバーサルピクチャーズ

⑧ 「誤診 First Do No Harm」 メリル・ストリープほか ポニーキャニオン

「ロレンツォのオイル」は、ニック・ノルティとスーザン・サランドン演じるオドーネ夫妻の息子ロレンツォが、副腎白質ジストロフィーという、極長鎖脂肪酸が代謝できないため、さまざまな神経障害を起こす先天性疾患に罹患し、当時これといった治療法がないので、オドーネ夫妻は、図書館で代謝について勉強して研究論文を読み、専門医とも議論しながら研究者によるシンポジウムを開催し、ついに、オレイン酸とエルカ酸を4:1の割合で含む「ロレンツォのオイル」による栄養療法を開発するという話です。映画の終わりに、「ロレンツォのオイル」の恩恵を受けている副腎白質ジストロフィー罹患者が紹介されています。学術誌に発表された論文でも、症状が出る前のなるべく早い時期にこのオイルをつかうと、発症を遅らせる効果があると評価されています。

「誤診」の英語原題は、英米の医学生が卒業時に誓うといわれている「ヒポクラテスの誓い」から由来しており、患者に対して「何よりも害となるようなことをなしてはならない」というものです。メリル・ストリープ演じる母が、薬剤では発作を抑えられない難治性のでんかんに発病した息子に対する治療に疑問を抱き、図書館ででんかんについて調べ、ケトン食療法 (Ketogenic Diet) を知ります。病院の医師は、ケトン食療法が二重盲検法という科学的評価を受けていないと反対しますが、息子がその病院の治療では良くならず、かえって薬の副作用のためにやつれていくのをみているので、息子を救うために、困難を克服してケトン食療法をうけさせます。

ケトン食療法は、高脂肪と低糖質食によって血中ケトン体濃度を高くしてエネルギー源にするもので、1920年代からジョンス・ホプキンス病院で行われており、成果をあげております。日本でも、小規模ながら難治性のでんかんに対してケトン食療法が試され、薬剤で抑えられないけいれん発作が抑えられることが確かめられております。しかし、高脂肪・低糖質食を続けることが難しいということと、ケトン食療法がなぜけいれん発作を抑制するのか、そのメカニズムがわかっていないということなどから、この治療法は限られたところでしか行われておりません。なお、この映画の終わりには、ケトン食療法のおかげでけいれん発作と無縁の生活をしている元患者の出演者が紹介されています。

以上、生命科学を身近に感じてもらえるような本と映画を紹介しました。いずれも一般の人を対象としており、予備知識がなくても理解できます。また、なによりも描かれている事実に驚かされると思います。学科専攻を問わず、興味をもって読んでいただけたらと思います。



「(わたくしの) 図書館だより」

法経科准教授 山 川 和 義

実家から歩いて20分ほどのところに吉田城址がある。昭和29年に再建された隅櫓(鉄櫓)が豊川を臨む。春には対岸から桜海に浮かぶ鉄櫓を望むことができる。吉田城はかつて今橋城と呼ばれ、東三河の豪族である牧野古白が築城し、永正二年(1505年)に完成した。ところが、その翌年である永正三年に今橋城は今川氏親と北条早雲に攻め落とされ、田原の戸田氏が治めることとなった。今橋城の築城を牧野古白に勧めたのが今川氏親だったそうなので、このあたりの事情は複雑である。もっとも、大永二年(1522年)には牧野信成が今橋城を奪回し、吉田城とした。その後、吉田城は松平元康(徳川家康の祖父)に落とされるが、牧野信成はその戦に船をすべて壊して臨んだ。いわゆる背水の陣である。私は最近までそんなことは露ほども知らず、小学校の写生大会でお城の絵を描いたり、まつりに行ったりして、のん気にぶらぶらしていたものである。

背水の陣

ところで、私は今の仕事に就いてから、結構なわりあい背水の陣をしいている(原稿とそのメ切のこと)。背水の陣は、あえて逃げ場をなくして必死でがんばり、結果を出すことという理解をしていけば、日常的にはそれほど誤りではないように思われる。私の場合は知らないうちに逃げ場がなくなっていることが多いのだが、まあそれも同じことだと考えている。でも、敵を知り己を知れば百戦危うからずというので、背水の陣をもっとよく知ることでもっとよりよく原稿と戦おうかな(?),と思ったり思わなかったりしている。

背水の陣の逸話は楚漢戦争で生まれた。楚漢戦争は、秦の初代皇帝である秦王政の死後に、陳勝と呉広が叛乱を起こし、それが中国全土に広がって始まった項羽と劉邦の争いである。項羽は楚の將軍の家柄という尊貴な血筋であったのに、劉邦はただのごろつきであったのが面白い。平民が王侯将相をしたがえて皇帝となったわけである。奇蹟といえる。晩年劉邦は疑心暗鬼のためか、あるいは、あえてしたのか、楚漢戦争での功臣の多くを粛清した。まあ、それはそれとして、劉邦は項羽よりも早く関中を攻略したために死地に陥るものの(鴻門の会)、多くの人材に囲まれて、後に項羽に対し大反攻に転じた。股くぐりで有名な韓信もその一人であり、これが背水の陣をしいた人物である。戦場では勝ち続けた將軍といってよい(楚漢戦争後に呂皇后の計略によって、戦場外であっさり殺されてしまう)。

韓信は張耳と数万の兵を率いて趙を攻めようとしていたが、これを知った趙王と陳余は、20万の大群を率いて井陘で塞(とりで)をつくり、対峙した。寡兵をもって大兵を破ろうとする韓信は、泚水を渡り、背水の陣をしいた。孫子(史記では尉繚子)によれば、川を背にして戦うことは挟撃されるのと同じであり、全滅必至の布陣であった。韓信はあえてそれをして、趙軍を打ち破った。孫子の兵法の体現者である韓信であれば、孫子にある言葉に逆らうことはないはずであるが、あえてそれを行ったところに、背水の陣の真の意味がある。

史記(司馬遷)の淮陰侯列伝によれば、韓信の作戦はこうである。韓信は背水の陣をし

いて、ただ趙軍を待っていたわけではない。少数の兵であえて趙軍に攻めかかり、佯敗する（わざと負ける）ことで、趙軍を塞から引きずり出す。しかし、井陘はもともと大軍を展開できない一本道のような地形であったので、漢軍は蛇の頭とだけ戦えばよく、実際に戦う兵数に大差はない。その間に漢軍は兵の一部を趙軍の背後に回し、塞を奪う。漢軍の強固な抵抗にあい、いったん塞に引き返した趙軍は、自軍の塞がすでに落ちていることを知って大混乱におちいるので、そこを挟撃し、殲滅する。これにより、陳余は斬られ、趙王は虜にされた。韓信の背水の陣は、死地において必死で戦って、そこで敵に勝利するというものではなかった。確かに背水の陣をしいたことは兵に必死の覚悟をさせることになったが、それは井陘という戦場全体で勝利するしかけの一つであった。背水の陣のミソは、逃げ場をなくして必死の覚悟をすることというよりも、常道に反するアブナイ方法ですら、結果を出すためのしかけとしてうまく利用したという点にあらう。大軍を展開できる場所で背水の陣をしいたら、いかな韓信といえども負ける。

小難しくなった。まあ、背水の陣とは単純な精神論ではなかったみたいで、きちんとした計算の上でないで成り立ちそうもないということだ。明日からは、計画的に原稿を書きたい。まあ、これを書いているときも、二つの軍を相手に沓水を背負っているのだが…。

刎頸の友

さて、上に出てきた張耳と陳余は魏の大梁の人で、楚漢戦争の初期に陳勝と呉広にしたがい、趙に独立勢力を作った。かれらは刎頸の交わりをかわした友として有名であったが、最後は敵味方にわかれて直接に戦をし、陳余は絶命。張耳は楚漢戦争後、趙国の王に封ぜられた。刎頸の交わりとはきわめて親しく堅い交わりのことで、相手のために自分の頸（くび）を刎ねられてもかまわないというほどの友情をいう。それゆえ、張耳と陳余は刎頸の友ではなかった。なかなかそこまでの友情を貫くのは難しいが、刎頸の交わりの元となった逸話の役者たちは、無論、そのような友情を貫いた。すごい。私にも、保育園のときから付き合いのある友人がいるが、このご時世だと頸を刎ねられるというところまでの覚悟はない。イタイこと、この上なかるう。

刎頸の交わりということわざは、戦国時代に趙の恵文王の時代に生まれた。恵文王とは兄である安陽君と対立し、沙丘で兄を殺し、同時に、父である主父（武靈王）を弑した者である。武靈王は狄をしたがえて中山国を滅ぼし、趙を強大にしたが、終わり方が悪すぎた。安陽君を殺したことで主父に罰せられる（殺される）ことを恐れた恵文王により、沙丘に閉じ込められ、餓死させられたのである。ちなみに、恵文王の弟の公子勝は食客数千人を擁した平原君である。どうやって数千人も養ったのやら…。

話が逸れた。刎頸の交わりは、趙の廉頗と藺相如の話である。廉頗は戦国時代の名将の一人といってよく、恵文王の一六年に斉を攻め、陽晋を占領した。これはおそらく燕の樂毅が趙・秦（史記によれば楚であるが、そのころ楚は斉を援助していたはずである）・韓・魏・燕の連合軍の総指揮官となり斉を攻めたときだろう。これにより廉頗は上卿となり、国政にあたる。他方、藺相如は宦官の配下であったが、ある事件をきっかけに国政に躍り出る。

どういう経緯かはわからないが、楚の国宝である和氏の璧が趙にわたった。またこれもどうやって知ったのか、秦の昭襄王は趙王に秦の一五城と和氏の璧を交換してほしいと申

し出た。一城とるのに数ヶ月かかることを考えれば、趙としては得な取引のように思える。しかし、この申し出に趙の朝廷は大変こまった。というのは、この申し出に応じた場合、和氏の璧を渡しても秦が本当に一五城をよこすとは限らず、よこさなかった場合の対応に困難が生じる。また、和氏の璧を出し渋ると必ずしも趙に同情が集まるとは限らず、秦に趙を攻める口実を与えることになるからであった。

いずれにせよ、趙は秦に使者を送らなければならなかったが、この問題をうまく解決することのできる者が、廉頗を含めて、いなかった。その趙に藺相如があった。藺相如は秦の申し出を受けるべきだが、もし秦が一五城を渡さない場合には、傷一つつけず和氏の璧を持ち帰るといって、秦に発った。藺相如が昭襄王に和氏の璧を渡したところ、一五城を渡す様子がまるでなかったため、進み出て、「璧に瑕がありますので、王に指し示しましょう」といい、昭襄王から和氏の璧を受け取った。すると藺相如は小走りして柱によりかかり、「王には一五城を趙に与える意志がない。ゆえに、璧を取り戻した次第である。無理やりに璧を奪い返そうとするなら、それがしの頭とともに、璧をたたきわる」と。藺相如はそのとき怒髪冠を衝いた。無理やり和氏の璧を奪うことをあきらめた昭襄王は、やむなく藺相如のいうように5日間身を清めてから、和氏の璧と城を交換すると言った。しかしここに実はない。そこで、藺相如はひそかに従者に和氏の璧を趙に持ち帰らせた。5日後、藺相如は昭襄王に面会してそのことをはっきりといった。「私は王（昭襄王）に欺かれ、かつ、趙（の国命）にそむくことを恐れ、璧を趙に持ち帰らせました。秦が趙に一五城をかならず与えるのであれば、趙は璧を秦にお渡しするでしょう。ただ、私は今、王を欺いたのであり、その罪は死刑にあたります。さあ、私を釜で煮ころしてください。」さすがに昭襄王は並の王ではない。昭襄王は怒りを収め、藺相如に礼を尽くして趙に帰した。この一事により、藺相如はその知恵と勇気を認められ、大夫となった。

その後も、藺相如は外交において勇知を示し、ついに上卿となり、廉頗より上の地位についた。廉頗はおもしろくない。「わしは將軍となって戦場で命がけで大功をたてた。しかし、藺相如は舌三寸だけで、わしよりもえらくなりおった。わしは藺相如に会ったらかならず辱めてやる。」それを聞いた藺相如は、廉頗を避けにさけた。ある日、外出中、廉頗を遠くに見た藺相如は、車を引き返して身をかくした。そこで藺相如の侍従たちは、「殿（藺相如）は廉頗どのを恐れて逃げ回っておられる。我々はもはやついて行かれませんか。お暇をいただきます」と。藺相如はいう。「秦王ですら畏れぬわしが廉將軍などをおそれようか。わしが恐れるのは国家の危機である。強力な秦が趙を攻めないのは廉將軍とわしがいるからにほかならない。この両雄がけんかし争えばどうなるか。個人的な仇敵関係は二の次であるから、争いを避けるのだ。」これを聞いた廉頗は、肉袒負荊（肌ぬぎして荊の笄を負う。謝罪の古式で、たとえば、商（殷）の微子啓は周の武王にこれをおこなった）し、「ここにいる心の卑しい者は、あなたがわたしにこれほど寛大にしてくれていたとは知りませんでした」と大いに謝った。二人は大いに語り合い、刎頸の交わりを結んだ。二人ともよい男である。

刎頸の交わりの二人は、それぞれの志に感服しあったこともあろうが、うがってみれば、国が滅ぶことは自らが滅ぶに等しいために、友であり続けるしかなかったともいえる。自分のためでもあり、相手のためでもあり、また、国のための友情であった。そうすると、私としては管鮑の交わりの方がより理想的に思われる。詳細を書く余裕はないが、確かに

そう思う。

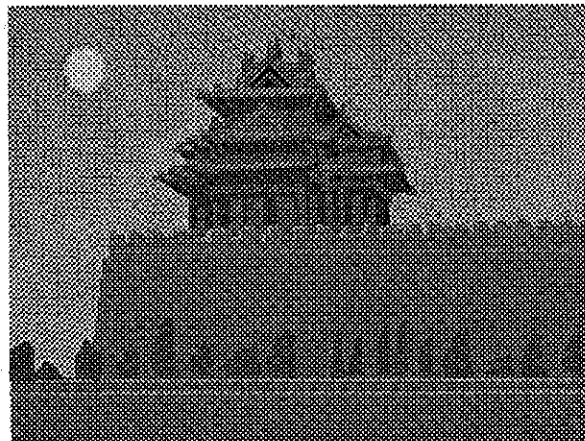
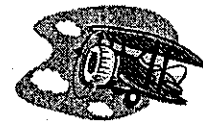
ちなみに、友という漢字は、又（ゆう）という字が二つ重なったものである。又は右手の形を表し、友は各々の手をもって助け合うという意である。又が横に並ぶ（双）のではなく重なるのは、盟誓のときの形式を表す（白川静『字統』）。神聖な儀式である。そういわれれば、漢字を見るだけでその情景が浮かんでくる。友であるということは、ただごとではないのである。こういうことを知る必要はないかもしれないが、知らなければそれが必要かどうか分からない。私自身は知らないことが本当に多すぎると、常に思う。また、本は読んでみるものだ、とも思うが、これは間違いあるまい（絵が付いているものも、よい）。

図書館だより

ということで、上のほとんどは史記によるところであるが、三重短期大学附属図書館所蔵の貝塚茂樹編『世界の名著 11 史記列伝』などを参照している。史記に興味を持った人は実際に読んでみてはどうか。何だこれ？と思いつつも最後まで読んだあなたは、もっと面白い本に出会うために、図書館へ、どうぞ。合言葉は、「そうだ 図書館、行こう。」

これが図書館だよりとなったかは、読んだ人それぞれがそれぞれに思うことであろう。どう思われようが、図書館の邪魔にさえならなければよい。実は最初、この夏に見に行ったライブのレポートでも書こうかとも思ったが、さすがに、やめた。おわり。

追記：この秋口に、またライブに行ってきました。一曲目は・・・。



新規受入図書案内

(2009. 4～2009. 9)

総 記 (000)

- 画像処理アルゴリズムの基礎理論 新井 康平
 情報と自己組織化 複雑系への巨視的アプローチ
 ハーマン・ハーケン
 英米絵本のベストセラー40 心に残る名作
 灰島 かり
 文学と悪 ジョルジュ・バタイユ
 <岩波新書>
 ルポ雇用劣化不況 竹信 三恵子
 政治の精神 佐々木 毅
 イワシと気候変動 漁業の未来を考える
 川崎 健
 国際金融入門 岩田 規久男
 和歌とは何か 渡部 泰明
 <岩波ブックレット>
 教員免許更新制を問う 今津 孝次郎
 脱「貧困」への政治 雨宮 処凛
 チョコラ!アフリカの路上に生きる子どもたち
 小林 茂
 希望と絆 いま、日本を問う 姜 尚中
 新型インフルエンザ・クライシス 外岡 立人

哲 学 (100)

- イギリスのモラリストたち 柘植 尚則
 フーコー・ガイドブック ミシェル・フーコー
 レヴィナスと愛の現象学 内田 樹
 前頭葉の謎を解く 船橋 新太郎
 心を発見する心の発達 板倉 昭二
 認知と感情の心理学 高橋 雅延
 カウンセリング実践史 氏原 寛
 自己評価メソッド 自分とうまくつきあうた
 めの心理学 クリストフ・アンドレ
 絵画療法 飯森 眞喜雄, 中村 研之
 歴史のなかの宗教心理学 堀江 宗正

歴 史 (200)

- 列島創世記 旧石器・縄文・弥生・古墳時代
 松木 武彦
 日本文化の原型 青木 美智男
 古事記の歴史意識 矢嶋 泉
 邪馬台国魏使が歩いた道 丸山 雍成
 エミシ・エゾからアイヌへ 児島 恭子
 観光コースでないベルリン ヨーロッパ現代
 史の十字路 熊谷 徹
 サリヴァンの生涯 ヘレン・S.ペリー
 行け行け!わがまち調査隊 市民のための地域
 調査入門 岡田 知弘, 品田 茂
 外国地名よみかた辞典 日外アソシエーツ
 現代に生きる「境内空間」の再発見
 中山 繁信

社 会 学 (300)

- 現代中国を知るための55章 高井 潔司
 いま、逆攻のとき 使い捨て社会を越える
 鎌田 慧
 現代社会におけるグローバル視点
 青森中央学院大学
 フランスジュネスの反乱 主張し行動する若
 者たち 山本 三春
 ポリティカル・サイエンス事始め 伊藤 光利
 政治の発見 高島 通敏
 都市対地方の日本政治 白鳥 浩
 自民党政治の終わり 野中 尚人
 ガバナンスの探求 今村 都南雄
 働く人をとりまく法律入門 大内 伸哉
 国家と社会の基本法 上野 幸彦, 古屋 等
 憲法と政治制度 藤井 俊夫
 世界史の中の憲法 浦部 法穂

国会議員による憲法訴訟の可能性

行政法読本 三宅 裕一郎
 物権・不当利得・不法行為 芝池 義一
 ゼミナール民法入門 弘道, 松山 恒昭
 刑事政策講義 道垣内 弘人
 刑法解釈の方法と実践 大谷 實
 裁判の具体性 楠本 孝
 民事再生法入門 井上 薫
 功利主義は生き残るか 松嶋 英機
 中国経済の成長と東アジアの発展 松嶋 敦茂
 PFI 神話の崩壊 尾林 芳匡, 入谷 貴夫
 アメリカ SEC の会計政策 杉本 徳栄
 弁護士のための租税法 村田 守弘, 加本 亘
 地方財政の行政学的分析 北村 亘
 新心理学的社会心理学 社会心理学の 100 年
 中村 陽吉

「公共性」論 ウィリアム・R・スコット
 社会保障の再構築 市場化から共同化へ
 横山 壽一

ベーシック・インカムの哲学 P. ヴァン・パリース
 人権保障と労働法 和田 肇
 判例労働法入門 大内 伸哉
 正社員が没落する 「貧困スパイラル」を止める!
 堤 未果, 湯浅 誠
 社会福祉のあゆみ 社会福祉思想の軌跡
 金子 光一
 北欧のノーマライゼーション 田中 一正
 物語の臨界 「物語ること」の教育学
 矢野 智司, 鳶野 克己
 保育園・幼稚園ですすめる食育の理論と実践
 小川 雄二

赤ちゃんの視覚と心の発達 山口 真美, 金沢 創
 秋の七草 有岡 利幸
 台所空間学事典 北浦 かほる, 辻野 増枝

自然科学 (400)

パソコン数学博物館 何森 仁
 エグセルを使用した統計学 柳沢 幸雄, 井上 豊, 五十嵐 正夫
 これならわかる化学実験 田中 晶善
 宇宙 100 の謎 珍問難問 福井 康雄
 イラストでまなぶ解剖学 松村 讓兒
 アンチエイジング・ヘルスフード 青木 晃
 認知療法の世界へようこそ 井上 和臣
 精神保健福祉法の最新知識 歴史と臨床実務
 高柳 功, 山角 駿
 食事バランスガイド Q&A 食育と食の指導に
 活かす 早渕 仁美
 応用栄養学栄養マネジメント演習・実習
 竹中 優, 土江 節子
 生活習慣病の分子生物学
 佐藤 隆一郎, 今川 正良

工学・技術 (500)

未来のモノのデザイン ロボット時代のデザ
 イン原論 ドナルド・A・ノーマン
 地域づくりの新潮流
 松永 安光, 徳田 光弘
 こどものあそび環境 仙田 満
 低炭素化時代の日本の選択 一方井 誠治
 世界で一番やさしい建築図面 綾部 孝司
 ミースという神話 ユニヴァーサル・スペース
 の起源 八束 はじめ
 高齢者のための建築環境 日本建築学会
 インテリアデザイン 図解テキスト
 小宮 容一
 1日 350g の野菜生活 久保 香菜子

産 業 (600)

地域の子カラ 夢を語り合い、実践する人びと
 「地域の力」研究会
 インド農村金融論 須田 敏彦
 農耕の起源を探る イネの来た道

宮本 一夫	アーネスト・ヘミングウェイの文学
ハチはなぜ大量死したのか	今村 楯夫
ローワン・ジェイコブセン	マダム・エドワルダ バタイユ作品集
鉄道から見える日本	原 武史
	ジョルジュ・バタイユ

芸 術 (700)

器財の意匠 器物文様	伊東 哲夫
正倉院の地図	飯田 剛彦
十二支 時と方位の意匠	川瀬 由照
動物絵本をめぐる冒険	矢野 智司
建築家の椅子 111 脚	SD 編集部
映画でわかるイギリス文化入門	
板倉 巖一郎, スーザン・K・バートン,	
小野原 教子	
運動とからだ 教養としての運動生理学	
朝比奈 一男	

語 学 (800)

辞書を知る	国立国語研究所
歴史の中の英語	小野 茂
かしこい旅のパリガイド	
田中 成和, 渡辺 隆司	

文 学 (900)

鉄の時代	クッツェー
英米児童文学のベストセラー40 心に残る名作	成瀬 俊一
江戸の文人サロン 知識人と芸術家たち	揖斐 高
雪冤	大門 剛明
1Q84	村上 春樹
33 個めの石 傷ついた現代のための哲学	
森岡 正博	

